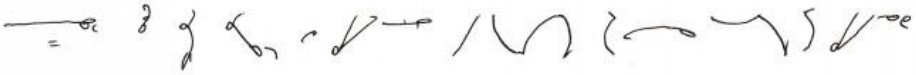
田鎖 76 年式 速記符号文例

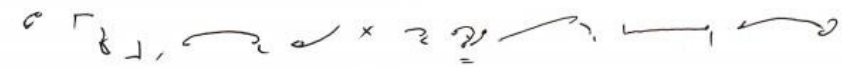
田鎖綱紀の真実　あれやこれやと推察し自得し…（略敬称）　平野明人

綱紀は少なくとも最初の発表から約 11 年後の 1893 年（明治 26 年）11 月には



「新式速記術」で「サ行、タ行」に「右上、左下」方向の

いわゆる「斜線」を用いている。これは熊崎式あたりからの動きと思われる

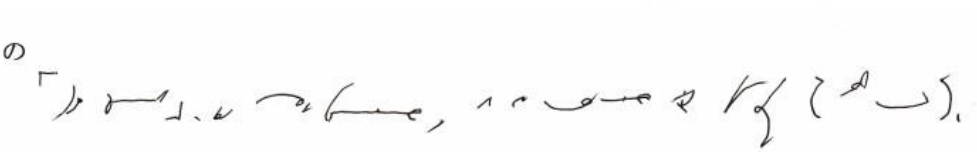


向きもあるかもしれないが、大きな流れとしては綱紀から始められているようである。

この

「新式速記術」における 50 音符号は、その約 20 年後に出された 1913 年（大正２年）

の



「大日本早書学邦語速記術」における 50 音符号と大差ないことからも、綱紀なりの

自身をうかがい知ることができる。松本清張（作家）の口述速記を

していた福岡隆が書いた速記符号の体系もこれに近いものである。（エ列

符号など、田鎖51年式の影響を受けたものとも推察される。）

綱紀の継承者とも言える子の一は、1908年（明治41年）には既に

速記者として活動していた。一が学び用いた符号は、恐らく綱紀によるところの

「斜線によるサ行、タ行」符号を含むものであったと推察される。それに

加えて、その時代までに速記界にあらわれた各派の速記符号の流れをも研究、

応用したであろうことも推察されるし、そこにさらに自身の創意工夫、発案を加えて

いったのではなかろうか。

とにもかくにも、その後、自身の研究開発による51年式、60年式、67年式、

76年式と、次々に新速記方式の創案者として並々ならぬ研究成果、速記界に

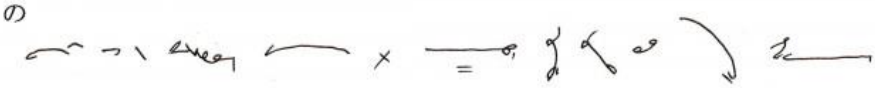
与える影響など、大なるものを残していった一であった。綱紀の研究も

さることながら、子息の一も立派である。実務畑におけるスポットライトを中心に事

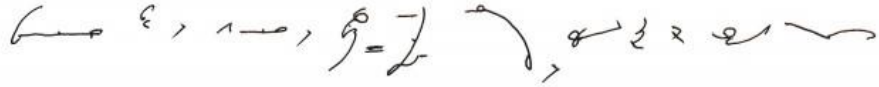
が語られがちな

面もこれまで多かったのではないかと思う。綱紀の最初の発表以来あらわれた田鎖系

の

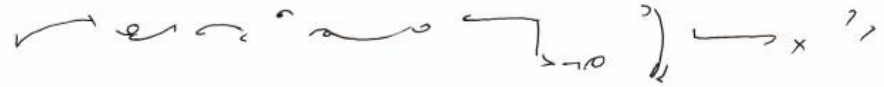


符号のほとんどは、その後、若林珀蔵らが改良、発展させていった流れをくむ



ものであり、その後の綱紀による「新式速記術～大日本早書学邦語速記術」

といった流れのものはむしろマイナーな系統であるかのような印象さえ受ける。特に、

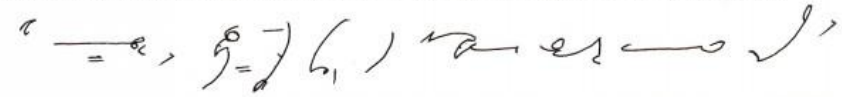


熊崎式登場以後はその傾向が顕著で、しばらくはいわゆる「熊崎式追随型、熊崎式亜

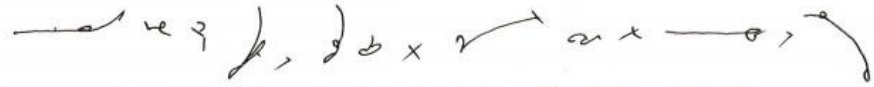
流型」

といった系統の折衷方式があらわれる程度でもあった。いろんな解釈は成り立つのだが、

やはり綱紀は、若林甜蔵を初めとする実務畑の流れとは異なる理想、

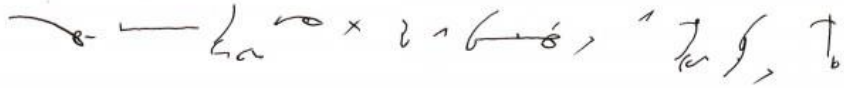


ゴールを描いていたと想像、推察される。そういった目的に立って考案、改良

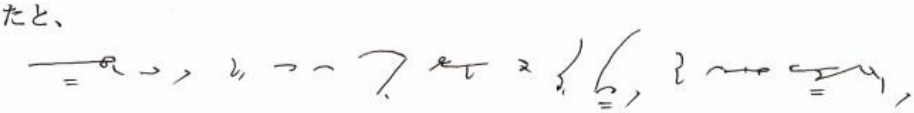


されてきたものととらえると、なおさら綱紀の符号系統、符号観の

妙味がうかがい知れるかのようでおもしろい。そしてその符号観を、実に確信犯的に保持、全うした



綱紀であり、それをこれまた見事に体現していった子息の一、そして孫の源一であったと、



今になって私なりの認識として自得するところである。